



る。音俊トシトシといふもいふなり。叔尾張國造ウヂノカサノクニノミコ八小豊命ヤチノトヨノミコ小姫コメ。上平寬ウヘノヒロシ其コノ子稻種命イナコタネノミコ日本武尊ヤマトノミコ東征トウセイ後ノチ。熱田本社アツタノホシヤ其子尻綱根命シラヅメノミコ時尾張トキノオウサキ連ツラシの姓ナリを賜タマハり。今の熱田神官アツタノカミは血胤チノヒなり。皆尾張人オウサキノヒト也。丹波タニハの瑞左ミズサ系ケイ著アツき。いふも系系ケイケイハ十八代ヤチハチノタビ継ツグぎて後ノチ事コト也。日本武尊ヤマトノミコ東征トウセイの大官オホノカミ也。本ホより尾張氏オウサキノミヤありし。今イマは系系ケイケイ氏ノミヤなり。日本武尊ヤマトノミコ東征トウセイの旧キウ儀ギ也。七柳ナナヤナギ腰ウサが子孫コノミヤノミコハ今智多郡チタノノ大高オホタカの米上コメノカミの祠官ミヤノカミといひ。其コノ人ヒト也。又熱田アツタ祠官ミヤノカミハ松家マツノイヘ氏ノミヤ也。いふも武尊ヤマトノミコ東征トウセイの後ノチ傳ツグせし。松家マツノイヘ氏ノミヤハ人ヒト也。この御人ミコノヒトの後胤チノヒといふ。いふも著アツきとて。これの中にコノナカニ孫ミコ子ノミコ在アリる也。ハ。

尾張八丈

尾張八丈オウサキヤチヤチといふ事コトハ文字モノジ乃ノ誤アヤマり也。尾張米オウサキノメ也。は。

籾ヒしと或人ナニヒトカといふ。いふ米メを八木ヤチノキ也。かたが。かて八丈ヤチヤチ也。

ナもるふも。尾張米オウサキノメの名ナ真マコトのきけ。昔ムカシよりコト也。

古歌コトウタ小物コトモノの名ナ乃ノかく。題チ小コ。池イケをミり。水ミヅ免メる。水ミヅ也。

多オホシ也。いふ。云クモの口クチも。あアり。なり。い。けい。は。飯イハ也。

いひく。即スガ穢ケガレ也。和名ニホノナ抄シヨウ。穢ケガレ所以ソノ通ス波ハ實ミヤコ也。云クモ也。

米メ也。但タけ初ハジメ五イハ文字モノジハ。サ。疑ウタガハシ也。事コト也。あ。

尾張米オウサキノメと稱ナヅケし。も。新ニホノ様サマ樂ガク記キ也。美濃ミノ八丈ヤチヤチ尾張オウサキ也。今イマは津ツ富トミ小コ傳ツグり。名ナ也。

一 傳記 三 卷之五
 一五
 一 傳記 三 卷之五
 一五

やて安平此大港は大砲臺を建て夫は和蘭の横
 文字をせ習せり。此は閩人鄭芝龍といふ者。海路の
 事小通達し日本の地へ渡り翁氏の女を妻し。
 一人の子を生む。此時芝龍は政名し平一官といふ。此子
 成功といふ。或は翁氏を王氏子作らば。初名森といふ。後
 親王の女をとりて是より安平を遊女あはせ。或年け子才を
 ばせり。鄭
 帰國より時臺灣に龍の形の色し。我ふ父子方一
 時きくは。大官もけびく。安平を隠れあはり。
 臺をやきく甘井といふが果して成功の時清人との
 江南の我ふまけ。廈門は軍と駐めいづく甘井を謀るふ。
 一説は廈門は國姓爺が名付し地名あり。何城といふ者あり。
 日本は津屋岬といふ者ありや。

傳記の
 一 傳記 三 卷之五
 一五

して。け岳を攻む。何城は日本の甲斐守あり。和蘭の通商あり。和蘭人を
 せむせんと欲く小時節也。あるとた甘鹿耳門は
 常に臺灣。大船も来り。このゆるせし。是け時海
 潮俄に漲り。高き三丈餘あり。たると國姓爺はり。と
 あり入る。黎人を安平城へ攻めはる。此地は我が先王の
 遺領なり。我等ふかき。其方の財寶雜具。つも
 取。皆持りけり。黎人を此理は伏し。臺灣を
 引拂ふ。是より國姓爺は地入り。赤崁城と
 承天府。臺灣城を安平鎮。まてと東路と
 いふ。其子鄭經は。江門小都。叔父の世襲。成功の母の
 母の實り。

一 傳記 三 卷之五
 一五

漳襟を慕へて急出。みづぐり天子と称し威勢を
振ゆ。其子克塽が時康熙二十年日本の天和清和三年清
より討海軍施煨して攻む。克塽降参し。
京師より軍將もふる。其地ハ臺灣府と改まり。
臺灣縣鳳山縣諸羅縣等々代官持まり福建乃布
改目の熱支那をりてす飛紅傳。後三十八年
はもさく。朱一貴といふ老亂をおこし大合戦あり。
臺灣のみを論じ淡水營の守備陳策一人堅く
守りて敗れざるのをり。志らざるも朱一貴終り
清朝乃援軍よりち負け南海へ逃げ入り。乃朱一貴

也。又郷民ども生捕く出せどもいふ康熙六十年のり

滿明子傳本以後又一百年程を經く乾隆五十八年

癸丑の春寛政五年より兵亂又起まり臺灣府彰化縣

林文興といふ者武秀才武豪富豪乃成なり。縣の官人

賄賂私慾あり。時々非理をいひつけ。終り文興を入牢

させ。其が材を奪へんとし。林氏ハ一族従者も多く

交友も廣く。何れも口惜しくおりに。壬子の秋八月

謀を合せ。黨を結ひ牢獄をうち破る。文興を募ひ

出。結句縣官ども打殺し。を獲りて争亂あり。縣

乃内々三縣をうち取らる。系部乃討ち。法州の援兵

一葉六つと餘あり。福建布政司より、の糧祿四葉あり。餘、福州乃津口より運送せし米凡、十萬担。江西省より十五萬担も運送せし。前、文興、彰化縣、大里村の山中へ逃く入る。尖石、福將軍一人六門をうち破り、大里へ攻寄せ、徒黨の若海彦せ、罪と教し、本領安堵ありと云ふ。所へ苦々知せらるるより、林氏が黨進くん、變りし、降せし者をも、万を、甲寅の春よ、林氏を族大に捕らむ。文興も心未へ懸送せらる。は、林氏ハ尚も南路に去る。我ふと、なり。以後の事は、崎人小寺

より、聞る。小、彼地、中、釋なりぬ。唐人も、蒙人、も、是、卯の年、此事なり。寛政七年、石曼子氏、奉り

因に云、國姓爺が日本へ加勢乞ひ、この船を傳へ、日本へ援兵乞ひ、賈船長李三貫より金子あり、出帆させ、洋中にて漂流し、日本へ達せ、實ハ日本より加勢あり、この船を、敵人と懼、臺灣の國、萬治元、戊戌、年、六月、廿、日、臺灣の國、姓爺の使者、船一艘、百十七人、乗組、援乞ひ

いづれにもせよ。國姓爺父子とも乞振乃平巧し
 極なり。ちや疑く。当考海島よりなり。浪華れ
 董葭堂主人の書に。鄭成功が朱舜水先生へ寄
 書して乞振の事と載せし。そのあり。其書本始
 らむとて。おのをも持りて。やうて偽物なりと
 いふ人おなり。又臺灣人の皇國に。いふ
 寛永四年十一月。理加のり。その祭。彦招のり
 あり。は美芳録の事。長崎人の話のみあり。
 いやんの書に記し。あり。おのり。

和蘭陀人

清人注業陀人を評して。身は長く。心は細なり。せり

いふ。種々此器物を巧造し。天文地理の事をも精細
 なれ。よかへを。数人。身も若く。心を大し。いふ。いふ
 をり。業人すを小臺灣を引拂ひ。國姓爺より。普陀落
 山へ礼入し。大小乃佛像も。大礮を以て。く打碎さ。
 像中もは。ゆる金銀財寶銅鐘の類も。で疎く。此尊
 取。大船も獲。西南海中。北崑崙へ。とわ。いふ。いふ
 崑崙より。大小二山對峙し。大西洋より。唐土日本へ
 渡り。其の中。途。船掛り。便利。乃。崑崙。な。い。山。元。來
 神。山。あり。て。人。民。な。り。只。其。の。と。住。め。る。と。蘭。人。お。の。物。を
 せんと。攻。撃。す。小。然。も。禁。人。乃。狼。藉。を。怒。り。山。へ。少。し。も

よせばね。契実例の大礮を發し。詰く討つる數
 十日。さても終らば。ひなを引。收也。此崑崙ハ鬼奴と云
 カフリ國なり。引と
 とも鬼奴の匹分たり。と。或人ハ見。又崑崙人の日平。渡りあり。
 事ハいふ。桓武帝乃延曆十八年。美蘭人三阿國ハ遣使。言今も
 これを又。崑崙人なり。と評せれ。是人。自天竺來り。と。昨幸け。云
 らん人分。持き。綿種を。南西海の諸國。賜さる。と。言を。引。事
 而見。崑崙。天竺の西南。乃。海。神龍乃。住所。と。奪ん。ん。とする
 され。天竺人。といひ。な。せ。也。

のみ。普陀落山ハ。唐土第一の靈場。一名梅
 峯。天子天竺の人も。
 南海。不。朝。活佛を。持。せ。り。や。て。巡。禮。さ。る。ハ。此。山。乃
 觀音大士。下。り。り。な。り。儀。ふ。り。り。根。籍。さ。る。人。を。心。細。く
 せ。い。ふ。と。云。り。吉。年。契。入。江。戶。より。歸。り。け。鋼。漢
 の。中。佛。像。と。數。り。な。り。買。求。め。り。と。見。え。何。の

為。り。や。り。ハ。僕。の。い。や。ま。き。物。也。本。國。ハ。去。産。り。
 小兒。オ。執。び。物。を。する。な。り。と。い。へ。し。け。を。さ。り。人。眉。と。聳
 め。け。も。と。彼。普陀。落。山。の。名。際。り。比。ま。れ。何。の。の。の。ハ
 因。ハ。云。唐。土。さ。く。銅。鉄。を。像。鑄。る。事。其。初。天。竺。人。ハ
 倣。ひ。一。板。より。ま。り。と。ま。り。と。か。ら。ん。漢。武。帝。の。時。休。屠。ま。ら
 天。を。去。る。金。人。を。い。は。す。也。
 越。王。内。踐。志。臣。范。蠡。功。成。り。名。遂。く。身。退。ハ
 天。の。道。な。り。と。扁。舟。ハ。竿。さ。り。五。湖。ハ。浮。ひ。行。き。ま。り
 少。と。と。あ。り。兒。鑄。物。師。ハ。命。一。と。其。像。と。鑄。さ。せ
 臣。ハ。引。引。は。朝。夕。招。禮。せ。り。事。可。也。是。漢。武。帝。此
 金。人。得。も。と。し。り。三。四。百。年。前。の。事。な。り。又。この

得^レて^シも^シ一^レ金^人を^レ佛^像を^レかり^入る^レ誤^りあり。
或^レ人^法益^法を^レ引^ク、坐^土視^自在^天、金^為身^頗衆^衆。
為^レ眼^師、此^像為^レ伐^種盤^足、何^事自^在天^乃像^かり^と。
一^日。又^日本^もて^レ佛^像の^眼中^へ珠^玉を^レ填^ルむ^のり^ハ。
運^芝以^後入^奉、母^も古^代中^をも^と事^わり^也。
け^も或^人の^一り^{。尚}得^ぬ也[。]

朝鮮征伐

大^高朝^鮮の^軍。明^朝の^大臣^{。其}天^子へ^急報^を存^り。
倭^王関^白大^軍を^レお^出す[。]十^萬、入^廣。十^萬、入^閩。十^萬、
入^淮。十^萬、入^山東。十^萬、入^天津。い^く廿^年と^奏せ^んと^す。

君^臣色^を失^ひ。一^人が^一ら^く。関^白六十^餘物^不と^す。
なり^から^く。獸^何離^穴即^擒。あ^うも^見よ[。]一^州より^七萬[。]
つ^の人^數を^レ出^さは^す。守^城の^兵。看^家の^男。田^地の^耕作^と。淫[。]
か^はら^る。難^道孟^浪。六^十萬^人海^を渡^り。あ^らむ^やと[。]
い^ふ。教^なら^くも^えふ^べら^く。き^計量^板あり[。]大^高朝[。]
流^り。口^惜。う^ちの^心流^り也[。]。漫^懂。小品[。]又^も時^一人^もて[。]
朝^鮮ハ^鮮釋^{あり}て[。]我^ハ軍^船二^子餘^被を^レ造^り。漢[。]
多^ク二^十萬^を選^び。彼^ガ空^患身^患も[。]彼^ガ石^志も[。]出^て。
軍^と島^地も^舍。直^不關^白が^居存^へ向^きと^乞。切[。]
實^ハ批^充擣^虛乃^策あり^て。教^なら^くも^二い^ふも[。]し[。]

といひ振るる。大岡より強り。んあく好のひ強りむう。
圖書 け付明朝也。我が兵勢に恐む。君臣驚愕不知所。
編 出京師戒嚴なす。彼國乃書にあほさうふそり。戒嚴ハ
其の用心は。城門をもち兵 卒守備するの事なり。唐土ハわろ。此兵威ハ歐羅巴諸國
ハも皆 之を轟きしと見え。近年來りし彼國の人を。
 此公乃威名を中出く。尚も評ありむとゆふせり。也。
 乞之し。ふ祭公の大武ハい。まきき事なり。此ハ朝
難題ハ震動し。程程より歐羅巴
東倫の諸國ハ震動せし事なり。

大合戦

大岡甲越乃あ将と評し。隅小眼を保つやどりの軍

術なりと仰らる。と。疎小公の大功大量より又強
 び。形もる。道策身ゆりて後。因碩も二代の
 名人基博士の上首より。或人因碩も。今故先生
 世。内。て。是下競ひ強り。いふあ。世と聞。因碩
 け事ハ其を年以。ひ考。る。に。く。い。其先を。せ。百
 戦百勝。恐。く。ハ相違。あ。し。夫先生ハ。その基。や
 て。あ。古。人。あ。く。後。来。者。あ。く。な。も。か。の。れ。先。だ。ふ。セ。バ。必。負。い
 と。な。く。是。も。く。基。の。位。ハ。何。も。一。知。り。り。べ。く。ハ。強。り
 画。く。い。ふ。其。人。実。ハ。世。の。人。乃。評。も。是。下。れ。中。強。ふ
 極。中。い。あ。る。と。い。は。ば。因。碩。是。も。亦。年。以。ひ。考。る

妙と云をむゆ色。相手より損し有る様一ハ。勝一ハ
 抄 豊臣乃太閤也。公ハ古今に名將。一代乃河合戦。何
あはれ。王の飛車手かけてあらはれ
 事毛河勝利なかり。其甲一河合自々是丁を十分の
 勝ふもや。河使くおやすがあまし。それいほもて問
 てせよ。公さもた。長久き此戦よ。これあもて何もあまら
 是ハ公河一生涯河も軍をさもて中さ。勝負毛
 勝負よそよれ。敵毛敵うてそよもて答へ給うむり。
 毛後河和陸よ成甲一ハ。一目負テを持基よあされ
 せも毛わあゆ。ある軍学者が國乃を備をましく一あり
いおなをく。是利のそ氏をわむ。あり
いんそ。かる事そくひ法をせ。是はを陶うてそあ也。南蛮の邪
法をれを事一。速は速ひ出。一ゆひも。ハ公明智の一瑠をり

そのなり。け暮の福ハ
直香一き

軍法

かけまくもかこぶれど。

神君の河軍法ハ。儒家の流を中とさす。是其終
 なき事にあまや。或人のゆり。其事ハ

神君織田殿河合戦の後。河洲より河對面を
 とき。末座も嘉是居きく。若居より一と織田殿。

け居士は八幡殿乃軍法の傳を得たる者ゆくと云。
 某學ひ度り下も。平氏なれが許さ。公も河合乃

華胄。その傳をうけ流り。故なきは。中さゆ。

易の推の
 卷て軍法
 の中心座
 實の妙と
 わきま
 越まよ
 一五とい
 と本よて
 山の舟
 舟入秋
 軍之法
 日玉と
 打一の
 五段を
 五段の
 五段の
 五段の
 の外よ
 とい

なりし。ゆゑといふをみるにこれハ飾りし烟といふ
物あり。一人の身はくちくち。一隊の人数亦あらず。
をとりハ一子此兵を三子も分け。一手が戦ハ一子ハ
核を入るべきかまへ。又一手は兵糧つくりはく体足と
まらぬ。ゆくりゆりゆり。て去程さすれば。人数
は少く事なり。老婦のいひ。看 ぞ朱子の中
さぬき。是ハ庸浅の云なり。三番のゆゑもあはる
事なり。八十は老将も去らぬ。子あまむとむ。一
隊の人数のいなり。一城一國亦去らぬ。いふは軍卒
多く集り。会具事なれども。民うなむ。去程はか

ふむ。やぐちりり。ゆありぬ。けを孔子の足兵
足食民信之と信らむべき。戦を事足し。去程多く事
ども。上下の和甚く。将卒手ひは疑ひたあは。陣も固
はる事。城も亦くつむ事。孫呉司馬皆是と敷衍
そむるなり。是と云ハ。論語ハ大將秘傳の巻とく入
る術をそく此軍法なりとす。又論語ハ既ハ庶あり。富之
操練の事なりと解き。ハ信くつむや。なり。
因曰。薦僧の本則一二通又さる小文。言洋器多て
一振あり。其時ハ和尙のさこれゆくと見えたり。志
う。か。彼普化街市揺鈴曰。明頭来。明頭打。暗

まで片履ら母らも。平生大洋ふ習色言。蘭人十四五丈
 乃大帆柱を大芥身よく三本うちきり。ホニス劫板をく。堀を
 出に。船中水夫熱か。里小。死力と竭。傷をせ。漏
 起る。潮水は精力磨を。防ぎ。く。見え。所は船入
 良翁奴名ハウノスカヒタンは。進出。木のま念と。棄て
 長崎へ。注進。救を乞。く。カヒタン。くも。く。り
 ハツテイラ傳言を。おろ。させ。それ。あげ。とい。や否や。ウ、
 ノス。箭乃。ぬく。米崎番船へ。潜付。れ。役人。成田。三枝
 や。も。飛船。見。く。大波戸長崎より。傍。海程。九。二。里。の。中。も。上。陸。。茶飯
 乃。来門。で。打叩。く。は。花の。宿番乙名。横瀬。丸。名。通。詞。本。本。在。り。大。小。船。丸。

け。和蘭人。ラス。へ。ち。せ。夫。より。熱。通。詞。へ。通。渡。せ。た。通。詞
 乃。岩。瀬。坊。十。郎。塔。各。蘭人。レ。ッ。テ。キ。ボ。ケ。ッ。ト。ウ。ノ。ス。と。も。録。船。中
 悪。浪。中。に。命。が。き。り。に。難。船。の。場。へ。馳。せ。レ。ッ。テ。キ。は。難
 船。の。為。り。ボ。ケ。ッ。ト。わ。又。上。陸。荷。漕。船。敷。被。色。は。身。が
 カ。ヒ。タ。ニ。が。拵。揮。よ。り。三。原。市。十。郎。ふ。ど。ボ。ケ。ッ。ト。も。に
 漕。五。せ。た。よ。録。船。の。船。頭。の。印。付。く。本。跡。浦。中。津。戸
 迄。の。漁。舟。と。潜。り。せ。助。け。させ。役。人。も。粉。首。と。考。へ。
 火。水。よ。な。つ。く。大。小。働。く。竹。田。孫。十。郎。松。本。若。治。印。等。七。男。ふ
 荷。漕。船。を。逃。く。馳。せ。付。け。荷。物。を。分。け。梅。一。数。百。れ。引
 取。り。く。本。跡。を。さ。り。て。引。寄。す。れ。ども。風。雨。の。烈。し。

派の言一松底より潜る堀ハ傷くがましく合ハ
すく又えきりぬ鎮臺の檢使を逃く素も是初五日十日
朝六時より教百の引松易く引せし八つ時土生田の
濱へ引せ九十餘人の和業人を小船易く上陸せし
他國より長崎も湊がごとく居て和蘭人と奪せ荷
物と分様も漕迎る船易く大坂乃小新般五百加州
の幸吉丸五百五は等し船數十艘あり製船ハ十九日船
還本土生田乃深泥の底へ沈みふりしけ所ハ海面より
一丈三尺餘の涯海なり抑ふの製船ハ堅固丈夫小銅
鉄と以巻包みし之のふきどいふる暗礁に奪り

上げしを岩を碎りしも松底の裂損せる事句と
いとも今度ハ松底と岩崩れり廢割らば少の穴あり
堀潜り入り船中満水とあれるは舟新造より九百十月
十九日ハ本新築を不徹屋を建てる沖筋りの通洞船格
加福島二十人餘り仮宿と定め歳重は備沈船乃と荷ハ
船格残らば取上げしれ彼數十船作れ銅ハ一斤もとるは
こそカビタニ第一の船取易しなり鎮臺より紅毛船及諸
船本陣浦濱手ふり寄有る堀多く差もは舟新造沈船と
成り殊に下様の洞も古差水線とと銅取揚方不便
利し手取存ありとハ出金十月廿七日出金し名也紅毛船



〇
七
五

千里の天

洋海を都^アはるの松^ア志^アをせり和蘭人^アを天災^ア是^ア死
 ふしと朽^アひあきし女^ア手^アと束^アね居^アりし日^ア更^アに死
 人の産^ア生^アせし如^アく歡^ア呼^アの聲^アた^アるし此^アより
 江府^ア圖^ア面^ア書^ア付^アとて注^ア進^アあり又^ア鎮^ア座^アを森^アをり
 中^ア府^アの裏^ア義^アして防^ア州^ア橋^アを溪^ア松^ア森^アをり
 沖^ア紅^ア毛^ア船^ア浮^ア方の儀^アに人^アよりお^ア斬^アり所^ア持^アて向^アり致^ア
 出^ア精^ア自^ア身^ア入^ア用^アとて早^ア速^ア浮^ア舟^ア相^ア成^アり修^ア理^アより取^ア掛^アり
 ぬ船^ア謀^アは拔^ア群^アの手^ア柄^ア紅^ア毛^ア人^アハ不^ア及^ア由^ア所^ア一^ア統^ア安^アん
 満^ア足^アと事^アん仍^アく為^ア裏^ア義^ア銀^ア三十^ア枚^アを^ア未^ア二^ア日^ア。

け事^ア中^ア國^ア九^ア州^アと教^ア勅^アして感^ア賞^アせしむる事^ア
 不^ア。やがて江戸^アより森^アをりて方^ア儀^ア先^アをり紅^ア毛^ア人^ア
 愧^ア恥^ア取^ア計^アの始^ア末^ア時の款^ア改^ア其^ア廟^アの多^ア及^ア此^ア間^ア拔^ア群^アを
 ぬ船^ア裏^ア義^アの儀^アに沙^ア汰^アく旨^アに圖^アを^ア未^ア二^ア日^ア。松^ア平^ア
 大^ア膳^ア賣^ア殿^アを私^ア代^ア書^ア勿^ア免^ア許^アとて下^ア書^ア給^ア完^ア了^ア殿^ア
 候^ア分^ア百^ア姓^ア惣^ア領^ア候^ア事^ア候^ア申^ア付^ア森^アをり由^ア緒^ア書^ア松^ア平^ア大^ア膳^ア賣^ア殿^ア

此地防州郡港松橋を溪村

大^ア書^ア殿^ア内^ア完^ア了^ア殿^ア

表^アを^ア十八^ア日^ア右^アの考^ア亦^ア年^ア前^アを肥^ア前^ア候^ア島^ア燒^ア燬^アし松^ア平^ア大^ア膳^ア賣^ア殿^ア

宿^アと播^ア西^ア漁^ア丸^ア人^ア数^ア七^ア八^ア人^アを租^ア毎^ア年^ア八^ア月^ア以^ア成^ア候^ア松^ア平^ア大^ア膳^ア賣^ア殿^ア五月^ア候^アと在^ア向^ア。南^アの八^ア輪^ア船^アの細^ア元^ア入^アと。細^ア子

出書者
徳永氏
共許氏
子七位
らるゝと
五人

帆を揚海を至り沈み船も早く軍船を取寄。逃掛せしむ。大
船も順風。殊も自ら。逐ふを至りて至れり。此も俄に風あり
變。彼大船をば吹返。多焼出れお入り來。粟人の大船とや
お船を破ら。火を備へて嚴く守。輒攻めんもなほ。の
敵意は盡し海を外偏數する地を燒。船燒死。粟船の後
曾火を放。り。ぞ粟船火。も。石火矢備防くは。遠
空へ燒。り。粟人。か。り。も。も。動功を。な。り。の。此は。志の
。粟船。史。記。に。吹。燒。地。を。至。り。事。の。船。入。敵。軍。船。へ。飛。亡。去。を。新。迎。と。も。粟
人。も。船。を。燒。て。以。突。け。し。活。け。も。敵。の。武。勇。敵。り。せ。方。か。く。船。中。火。を。掛
。れ。や。そ。粟。船。打。開。き。船。先。を。海。へ。落。し。身。を。死。せ。り。も。粟。船。を。擊
。燒。失。り。敵。の。軍。も。數。多。我。死。し。も。も。南。へ。敵。を。對。て。燒。燵。せ。り。其。燒
。跡。に。船。今。の。村。の。倉。代。浦。底。に。在。り。物。は。り。船。種。船。を。火。軍。の
。船。に。二。説。り。も。是。お。れ。彼。城。通。り。れ。説。今。の。村。と。り。

婦人不妒

後漢書に 皇國の風を稱して 婦人不妬國人多妻
妾と記せり。後より歴史りをけ事と稱を譽り。
我皇國の采可に秀で。一事一物善く。ぬ事なれ。ハ
唐人の譽ると得ともか。し。不妬多妻妻とい事。今。魏
夷乃風俗より。一。輒夷も。一。点の酋長も。何りのハ
大方。と。十人二十人持。其。妻。小。小。家。造。り。酒。一。五
里の里。乃至十里二十里。傳て。餘。所。當。り。を。使。ま。す。り。ハ
。アツシ。ヨタル。の。類。と。織。り。ル。ハ。唐。太。を。り。出。麻。子。の。粒
。ふ。由。自。か。子。業。は。世。傳。り。各。夫。は。衣服。を。り。て



里空德

着用さるるなり。夫も亦日本より交易し得る
糧の類を偏^{カタチ}好^{ウケ}み。妻も配分しやれ。妻の意を
濁^{ウケ}酒を造^{ウケ}り。呼^{ウケ}使を以^{ウケ}夫と招^{ウケ}く。夫妻五人を
六人を同^{ウケ}さ。それか所へゆ言^{ウケ}ハ。迎^{ウケ}入^{ウケ}せ。多く此
婦人うち混^{ウケ}。濁^{ウケ}酒の宴^{ウケ}と役^{ウケ}け。歌^{ウケ}舞^{ウケ}の樂^{ウケ}となり。
少^{ウケ}も嫉^{ウケ}妒^{ウケ}らんを。夷^{ウケ}人^{ウケ}の農^{ウケ}業^{ウケ}を。う^{ウケ}ば。手^{ウケ}中^{ウケ}操^{ウケ}備^{ウケ}の
のみんと。夷^{ウケ}人^{ウケ}の歩^{ウケ}り。あ^{ウケ}ら。ゆるもの。背^{ウケ}負^{ウケ}ひて
海^{ウケ}邊^{ウケ}に。漁^{ウケ}業^{ウケ}と。親^{ウケ}甘^{ウケ}く。慰^{ウケ}師^{ウケ}む。若^{ウケ}死^{ウケ}んれば。
親^{ウケ}族^{ウケ}うち集^{ウケ}り。自^{ウケ}分^{ウケ}く。あ^{ウケ}は。食^{ウケ}物^{ウケ}を。手^{ウケ}向^{ウケ}け。
子^{ウケ}は。三^{ウケ}日^{ウケ}食^{ウケ}物^{ウケ}食^{ウケ}り。棺^{ウケ}斂^{ウケ}り。其^{ウケ}人^{ウケ}平^{ウケ}日^{ウケ}如^{ウケ}し。

器物衣服を以^{ウケ}。葬^{ウケ}埋^{ウケ}り。武^{ウケ}器^{ウケ}と以^{ウケ}す。居^{ウケ}妻^{ウケ}の間。
一年の妻をり。志^{ウケ}どく。人^{ウケ}よ。出^{ウケ}遣^{ウケ}は。日^{ウケ}中^{ウケ}介^{ウケ}へ。出^{ウケ}ま。必^{ウケ}
或^{ウケ}ハ。三^{ウケ}日^{ウケ}食^{ウケ}物^{ウケ}食^{ウケ}り。天^{ウケ}日^{ウケ}と。名^{ウケ}を。一^{ウケ}園^{ウケ}名^{ウケ}も。親^{ウケ}戚^{ウケ}朋^{ウケ}友^{ウケ}訪^{ウケ}
ら^{ウケ}ば。吊^{ウケ}慰^{ウケ}し。生^{ウケ}涯^{ウケ}の事^{ウケ}。語^{ウケ}り。出^{ウケ}し。一^{ウケ}年^{ウケ}と。し。り
哭泣^{ウケ}す。親^{ウケ}夫^{ウケ}身^{ウケ}。悔^{ウケ}り。後^{ウケ}ハ。其^{ウケ}窟^{ウケ}室^{ウケ}。居^{ウケ}る。事^{ウケ}と。
得^{ウケ}せ。ば。都^{ウケ}人^{ウケ}。住^{ウケ}ま。ぬ。小^{ウケ}家^{ウケ}多^{ウケ}く。又^{ウケ}大^{ウケ}く。焼^{ウケ}拂^{ウケ}す。し。り。
父^{ウケ}妻^{ウケ}と。む。手^{ウケ}結^{ウケ}り。父^{ウケ}母^{ウケ}死^{ウケ}別^{ウケ}せ。若^{ウケ}し。中^{ウケ}年^{ウケ}と。し。り。子^{ウケ}
經^{ウケ}く。途^{ウケ}て。母^{ウケ}親^{ウケ}父^{ウケ}ハ。出^{ウケ}遣^{ウケ}す。なり。や。若^{ウケ}ぬ。也^{ウケ}。忽^{ウケ}辨^{ウケ}
泣^{ウケ}して。止^{ウケ}ば。若^{ウケ}し。を。表^{ウケ}情^{ウケ}を。表^{ウケ}す。出^{ウケ}せ。り。て。
き。し。男女^{ウケ}の。差^{ウケ}別^{ウケ}ハ。別^{ウケ}と。同^{ウケ}く。せ。ば。或^{ウケ}時^{ウケ}。夷^{ウケ}人^{ウケ}。松

前の城下と通す。所家の婦人の門前より小便せり。罪と云ふ事限らば。予と見受け。夫はそれを予。罪と云ふ事限らば。不知事内より。婦人の内私をうかひ。松を多く入り。なり。又日本の人彼地へ渡り。地夷父子の男あり。其女子は。藪慢の戯まといふられ。狗と獸と罵りて悪口せり。と云せ。は等。日本入ま。恥ぢる事あり。又奴僕の手とウタレといふ。豪富の酋長は。ウタレと教す人。在はふるなり。皆祖先より相傳乃。當代の心。唐土の先聖王。天地宗廟諸神と祭り。あふ。其乃。七ヶ月も前より。特牛と表ひ。一形あり。ぬ取扱ひ。牛に

飾備を之。服き。根のを傳ふ。あり。此日となれば。け。善い。牛と。犠牲は。傳ふる。牛。これ。身を刺。血をとり。神。小宰。を。神。は。若。あ。人。の。神。は。然。の。子。と。夷。女。が。乳。を。育。て。死。に。時。節。れ。あ。り。は。傳。る。牛。と。然。の。遠。く。を。傳。ふ。その。ん。と。用。ふる。は。同。し。事。あり。然。の。日。は。海。づ。神。あ。り。カ。ム。イ。ニ。カ。ナツケと。持。け。身。邊。の。祓。を。ふ。ひ。カ。ム。イ。ニ。カ。ナツケ。は。茅。あ。り。い。は。八。咫。夷。は。茅。と。神。祭。り。又。一。年。の。大。祭。り。ヨ。ウ。シ。と。い。ふ。用。ふる。和。傳。の。古。れ。なり。又。一。年。の。大。祭。り。ヨ。ウ。シ。と。い。ふ。三。ツ。テ。地。夷。は。曆。を。た。れ。も。月。と。見。る。月。は。晦。朔。を。去。り。草。木。の。榮。枯。も。と。葉。節。と。量。り。毎。秋。り。を。又。冬。至。も。

田螺ハ子まうを沖に散らし置て一あき夏秋ハ田小
毒ある物を喰ひなかり

生まはるるのなき石も有る一あきハを生むの土を
斗三升も貯置置一極別風の疎なる地をハを此の
ちと石の土を添一用也

おまへあゝの海松ハ小桶を他より下の籠に添て飲石の
竹筒をさし一石筒の末は本流へても布をさして是を
漏すハ小桶の中は本流の布を置き土を入れてあを
おの桶へ汲入を添なり

人の衣服ハを玉の風をまき添て臭をさし下の方邦國
より中ある義なりよりて大室地は到らむハ毛裘を繕
置一おの裘ハ靴履靴の類にまきて筒袖小製
す一あき夏の疎の下より室地の物ををうけ出
用んたり秋平袖の衣服ハ暖玉の風俗より極寒の地は
合期せぬ事へそんゆあり

室地は冬は冷む人常薪の積をハおの時をまよ
暖くとも後日は傷を又ハ控氣の志をせざるに獲たり
下々も石のぬまて用んる夏事へはの投り

冬小まきくハ小地の土をハこけて夏中海霧の瘴
氣多し一夏秋ハ人の腰理ひききたる時をば多く
不正の物事は感冒すべしそんゆかくてハ直り

毛裘を製する事容易あり一石の果よりハ文流の

筒袖を肩差ある處一右のそんむを分三枚も重ねて着
用すれハ要なきをさく方らぬものなり

文流の筒袖ハ宮地までハ上下共必用の物ニ
極寄の色地ニ冬仕居ずハ海獸も山獸でも
肉食を純ゆをくらハ赤色地ハ邪氣を肉へけり
用んたりはとて一日一度ハ肉食を食掛る

蓋て獸肉の袖を貯へ置き肉は置き時右の袖を食
ね下して用ゆる

極寄の色地ハ多る人ハ肉桂丁子を貯持る一凡吾洲寄の
巾を籠りする肘衣の肉桂丁子を酒に浸し乾き加減ハ腥臭
面并を去る一凡門兩狭陸臺も常々一電りて邪
氣をうけるものなり

海陸ともモヤ涼き時ハ丁子肉桂喘て面於に塗る一
兩腋風門にも付着て衣をよる

右の肉桂丁子格別多き酒の温方ハ法き時ハ
逆上の憂あり程よく調する

海島の旅りハ胡椒を貯おる一總して海島の毒中り
まゝハ海臭海蟲の刺ヲ糞止るハ胡椒を傳六後用
すハ毒を解き事神の事

何奥ハ赤色不_レて胡椒ハ多く林和と知る

例寄の時多胡椒を酒に下して後用する功
まらざるなり

瘴氣をうけ六折病の病しなる時色比の乃中より彼
 谷もなく黄葉も合朝は家候きく重夜は暫事由
 別て邪氣の感胃ハ速に瘵治せされハ雲を攻の志もあ
 り時ハ何れも有命の志よめを汲逢申ハ火を焚小石を
 かつ三ツ焼きて木の葉よ入るハ熱湯と称する火を焚小石を
 下して急事を辨せむし石貯おき茶法清浄するは
 石の仕方より良別熱湯をゆるは色ハ振おき茶法清浄
 希程かろし一人ハ行なを承るは乃之ハ振おき茶法清浄
 水飲を授け挽きたる事なり是等用よなきは食おを
 焼ふも至極希程の事なり
 此其論の水飲忌旅申すて饑なる時湯を調調糖糖を
 掻立て用ゆるは希程なり

水飲ハ小端をのこしくあ方お少し再ありて均均を
 通き充あるを

石水飲の挽法よ小され年月なる式す斗の鈎お半つ等
 量を一火よ煎たる時お扱ふ乃之を此よりハ三十里
 六十里乃至百里も人家のあきやありて重立なる人ハ
 勿論下しめても昔り教へて用よ有なき事なり

希に載る種ハ膚淺の事として持ぬる處よりハ是余が
 要入よりぬるふあは異邦にて風土殊なる地を尋する者
 皆大の用心あるよりなり是事ハ此邦の書を讀て智を
 考へて一を國字比はふる人多く病病はがして物の

用は之ぬ事ハ之と世と違ふ是地と風土の殊ナクを辨
する不周ナリテ新事ナリ以用人を以テ之を以テ
事ヲ誠ニモ腫毒の症を以テ六煩ナクも移りて
人ノ身を堅固ナリテ忠をも功をも勵ははむる
人の心も之を本とせざる先私の友ニ拙筆を措き能ハ
るるを不如此

戊辰仲春

乾田一卜二口之樗散人

年一夕付流石先生得

氣步每彌善二之子

祀先生抱眉悦話者

や文館大守者時好

淡味欠先生亦為此

況有澄氣之或涉水

奇。道實多。所窮。出。下。在。唯。魔。者。讀。之。必。棄。其。驗。之。二。之。子。謂。年。曰。如。小。人。半。可。居。如。是。系。中。所。傳。安。曰。子。半。之。力。多。少。姑。墨。否。其。

可。性。五。出。費。之。流。黃。酒。文化。庚。午。春。又。

白。而。涉。三。物。後。





愛知 県



1104082081

049

28

1-3